

カトリック行橋小教区：主任司祭 ベリオン・ルイ神父

★子どもの頃私が通っていた教会には、学校や病院で働いていたシスターたちも大勢来ていました。教会の司祭が、「シスターはイエスの花嫁ですよ」とよく聞かせてくださいました。



反抗期のせい
か、ある日またそれを言われてふと思いました。「そうだとすればイエスは気の毒ですね」と。それは、シスターたちの中で綺麗な人がいなかったからということではありません。教会での多くのシスターたちの表情を見て、イエスはその花嫁と付き合っ
て嬉しくなるはずがないと思ったからです。「教会は神の家だから」という名目で、当時、聖堂に入ると、それらしき硬い顔、険しい表情が求められていたかのような雰囲気でした。「そのことについて誰かが神様の意見を尋ねたことがあるかね」とさりげなく一人の神父に伺ったところ…足が早かったため助かったことを覚えています。

そのちょっとふざけた懐かしい思い出が頭を過ぎったのは、3週間もの間、同時通訳のため伊万里と安心院のトラピスチヌ修道院で生活を送った時のことです。

～トラピスチヌ修道院～

そこでシスターや修練者はどんな生活をしているでしょうか。沈黙を守り、祈っているということがよく知られていると思いますが、どうしてこんな生活をしているか、そのことはそれ程知られていないかもしれません。「私はあなたがたを愛したように互いに愛し合いなさい」というイエスの言葉を徹底的に実行するために、シスターや修練者は「共同生活」を送っています。福音の精神を持ち、活かして、共同生活を送ることが目的です。兄弟姉妹として。冗談を言うことを好んでいる母院長(ぼいんちやう)

によると、女性だけが共同生活を送ることが出来る、このことは神が存在する唯一の証拠だそうです。その言葉を訳した途端、爆笑が起こったことは私の滞在中の新鮮な思い出の一つです。「共同生活」を養い、支えるために、シスターや修練者は「共に祈り」、「労働」をしています。お菓子作り、畑の仕事など…。それは、出来る限り、「沈黙」のうちです。余計なおしゃべりをすると、頭も心も大切なことから逃れて行くからです。

ずいぶん厳しい生き方だと～信者も含めて～現代の人は思われるでしょうが、その召命に応える方がおられるということは、教会にとっても世界にとってもかけがえのない恵みと宝だと思います。シスター方や修練者たちのため、またその生活に呼ばれている方々が惜しむことなく応えることが出来るために祈りたいと思います。

修道女の明るい表情に触れ、その生活を垣間見て、感謝の気持ちが私のうちに沸いてきました。3週間もの間いただいた恵みを、祈りのうちに味わい続けたいと思います。

伊万里、安心院トラピスチヌ修道院の皆さんありがとうございました。



* 留守のため
多少の迷惑をかけたことに対するお詫びのしるしとして、行橋、豊津教会の皆さんに最近の私の生活の一コマを紹介させていただきましたが、おわかりになったように、それを通して浮き彫りにしようとしたのは、トラピスチヌ修道院の存在の大切さを新たに認識し、そこで生活している方々と心を合わせて祈ることへの呼びかけです。

～ついでですが、お菓子などを注文することによって修道院の生活を支えることが出来ることを忘れないように心掛けてはと思います。